三好京三の娘と私

父から娘へ
娘から父へ

三好京三・佐々木千尋

三好京三の娘と私

父から娘へ　娘から父へ

三好京三
佐々木千尋

講談社

三好京三の娘と私

一九八二年十一月十七日　第一刷発行

著者——三好京三、佐々木千尋

©KYOZÔ MIYOSHI, CHIHIRO SASAKI 1982 Printed in Japan

発行者——三木　章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目一二一二一　郵便番号一一二　電話東京〇三—九四五—一一一一　振替東京八—三九三〇

印刷所——慶昌堂印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——九八〇円

落丁本、乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200107-1 (0) (生C)

三好京三の娘と私——目次

プロローグ　10
《娘の日記――バレンタインデー前夜》・《父親から――成長讃歌》
第一部　高校三年受験時代――父と娘の交換日記Ⅰ
大学をめざして　16
《娘の日記――大学入試突破の目標をかかげて》・《父親から――小人閑居して不善をなす》
大学とは何か　19
《娘の日記――なぜ大学に行く気持ちになったのか》・《父親から――世間なみ……》
大学で何を学ぶか　21
《娘の日記――専攻を考える》・《父親から――宗教・哲学の必要性》
やる気　25
《娘の日記――家事能力と受験生》・《父親から――やる気と持続力》
下宿生活　30
《娘の日記――人生初めての選択と挑戦》・《父親から――下宿の効用》・《父親から――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

忙しさ、ということ》
自己のペース　35
《娘の日記――勉強のペース》・《父親から――自分のリズムを……》
進路の選択　38
《娘の日記――私立文系》・《父親から――偏りとバランス》
時間の使い方　41
《娘の日記――逃げ道》・《父親から――間違いと惰性と》
夏季講習（その1）　44
《娘の日記――夏季講習と私》・《父親から――ゼミと親馬鹿》
夏季講習（その2）　48
《娘の日記――がぜん奮起する》・《父親から――七難八苦をのぞめ》
魔の季節　51
《娘の日記――フーテン風の外人》・《父親から――ことわりかた》
進路の確定　54
《娘の日記――学部変更》・《父親から――快刀乱麻》

あせり　57
《娘の日記――時間がない》・《父親から――たゆまざる精励》
受験前　60
《娘の日記――今月の目標》・《父親から――学力向上》・《父親から――決意》
自己嫌悪　66
《娘の日記――受験を前に由々しきこと》・《父親から――自己嫌悪ということ》
受験直前　71
《娘の日記――いよいよ最終コーナー》・《父親から――親の心》・《父親から――学部選択》

第二部　受験期の親子の心理――父と娘の交換日記Ⅱ

自分というもの　76
《娘の日記――ほんとうの私って?》・《父親から――模倣と剽窃》
青春とは　80
《娘の日記――まどいの春》・《父親から――青春の屈折》

悩みの時期　85
《娘の日記——悩みと救い》・《父親から——ことばと人間》
親切心　90
《娘の日記——気弱な親切》・《父親から——小さな親切と、大きなお世話と……》
高校生　93
《娘の日記——やさしいL先生》・《父親から——高校生であること》
人間関係　97
《娘の日記——一冊の参考書》・《父親から——ありがたい人間関係》
友情　100
《娘の日記——わが友情》・《父親から——たしかな成長》
人生とは　102
《娘の日記——手ごたえのある人間関係》・《父親から——人生について考えよ》
自立　105
《娘の日記——栄えある自立》・《父親から——危惧と自信と》
人生の目標　110

《娘の日記――「楽しく生きる」ことが人生の目標》・《父親から――お前なりの努力》・《父親から――人生の目標》
体育祭　114
《娘の日記――高校生活を楽しむ》・《父親から――幼稚園的……》
師　117
《娘の日記――わが町の曾野綾子さん》・《父親から――己がバイブル》
愛　120
《娘の日記――捨てること》・《父親から――与える愛》
友人　123
《娘の日記――わがクラス》・《父親から――個性的ということ》
憂鬱　126
《娘の日記――私の鬱病打開策》・《父親から――賢い解決》
自己　131
《娘の日記――自己を見つめたい》・《父親から――1、分校時代　2、自己の認識　3、逃げぬ者》

告発　137
《娘の日記――〝神は告発しない〟》・《父親から――小説で、告発は無用》

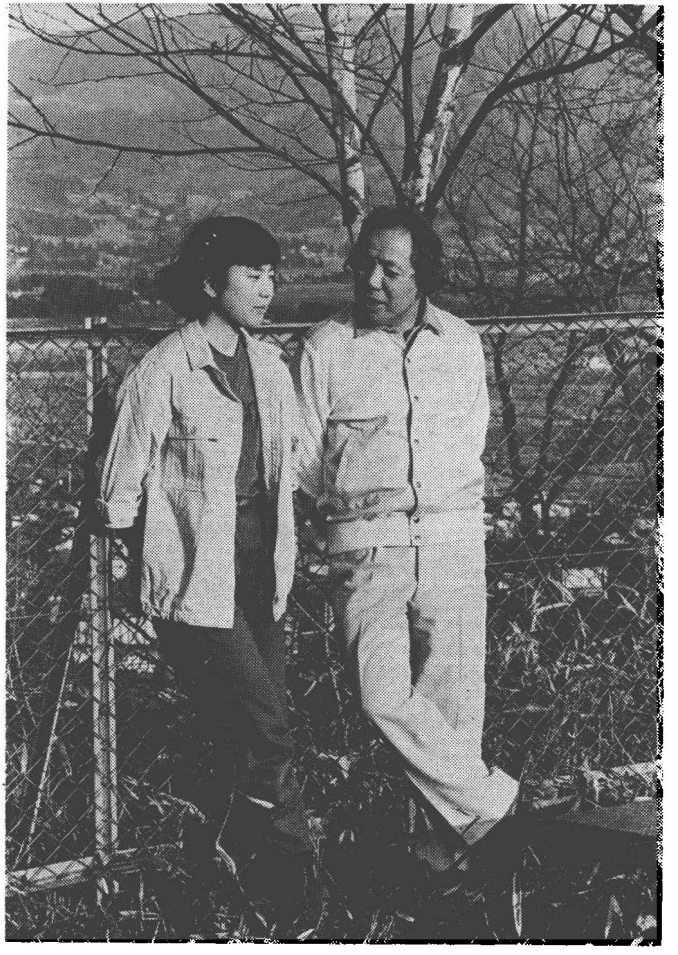
第三部　高校生活を振り返って――親子対談
都会の良さ、田舎の良さ　144
都会願望　144　田舎のいいところ　147　惣領(そうりょう)の立場　149
忍耐と抑圧　153　村人の生き方　156　都会へ出す親の気持ち　158
浪人生活　160
下宿生活の功罪　160　進路の選択　164　父親の教育方針　167
職業の選択　168　娘の長所　172　浪人決定――新聞配達しても　173
自立へ――親離れするとき　175　失恋と浪人とどちらがつらいか　176

第四部　いま出発(たびだち)のとき――父と娘の往復書簡
受験の失敗　181
《娘から父へ――受験失敗の渦中で……》・《父から娘へ――いまの岐路について》

独り暮らし　185
《娘から父へ――予備校のこと、レオのこと》・《父から娘へ――自分の力を存分に……》
計画性　190
《娘から父へ――独り暮らし》・《父から娘へ――計画性について》
孤独感　194
《娘から父へ――都会病孤独症候群》・《父から娘へ――孤独について》
文学について　199
《娘から父へ――受験勉強について》・《父から娘へ――受験生と文学》
文化　204
《娘から父へ――文化について》・《父から娘へ――若者の憧れ》
エピローグ　209
《受験生の親》

装幀／蟹江征治
カバー、本文写真／本社写真部・斎藤和欣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



小，中学生のころ，父によくつれられて来て遊んだ
懐しいおものみ公園にて

プロローグ

NHKのある番組で、小林登先生とごいっしょした。子育てについて語る番組であった。小林先生は、ごく控え目に、

「わたしが息子にしてやれることは……」

というような言い方をなさる。この方は、国際小児科学会会長、東京大学小児科学教授、東大医学部付属看護学校長、医学博士等の肩書きをお持ちの偉い方なのである。なのに「わたしがしてやれることは……」とおっしゃる。何でもおできになるのではないかと思いながら、わたしは本物の知識人の謙虚さ、奥ゆかしさに思いいたっていた。わたしなどは娘を前にし、「俺の言うとおりにすれば間違いない」と、元小学校教師の傲岸(ごうがん)さをそのままに、きめつけを主体とする教育をやり続けて来たのだ。

恥じ入った。そして、小林先生をまね、

「わたしにできることは……」

と考えた。わたしは元国語教師で、現在は小説書きである。わたしにできることは、やはり

娘をひとり東京の予備校にやるのに，父は最初反対したが……

娘の作文を手直しすることぐらいのようだ。よし、交換日記をやろう、と決めた。娘に持ちかけると、「いいわね」という。うてばひびくというやつで、この辺が娘のいいところだ。このことを通して、娘の人生論にかかわってゆくこともできる——思春期の子育てということにもなりそうであった。

かくて旧臘十二月十三日、娘とわたしの交換日記はスタートした。

〈娘の日記——バレンタインデー前夜〉

父が沖縄から帰って来た。取材旅行である。十年以上も前、沖縄が本土復帰をする前に、私も何度か行ったことがある。（注　亡き実父きだみのるとともに、である）那覇の朝市、

竹富島の星砂、米軍の上陸用舟艇に乗って行った珊瑚礁、仲のいい友だちのできた西表島(いりおもてじま)――沖縄には思い出がいっぱいだ。旅には慣れていたはずの私だったが、西表島を離れるとき、友だちと別れるのがつらくて、生まれて初めて、泣いておじちゃん(注　きだみのるのこと)に抵抗したことが、ついこの間のような気がする。

その私の足跡の一つを、父は見てきてくれたのである。私がお世話になったYさん(注　石垣市文化会館館長・与儀玄一氏)とも会ったという。私は不思議な気分だった。『子育てごっこ』以来、私は自分の過去を忘れてしまおうとばかりしてきた。しかし一つ一つの思い出の鮮かさは消えることがない。必死になったり、うら悲しくなったり、はしゃいだりした自分の姿が、やっぱりなつかしいと思う。別に無理しなくていいのだ。そう思うことにした。

さて、一週間ぶりにわが家の茶の間におちついた父は、

「お前の歩いたという砂浜を見て来たよ。お前の足跡を探しながら」

と言って、ビニール袋に入れた砂を炬燵(こたつ)台の上にのせた。星砂がまじっている竹富島と西表島の砂である。私は「お父さん、素敵！」ととびつきたくなった。

ところが娘を大好きな父親は、まだあるぞ、というような顔で何やら紙包みを指さし、にこにこしている。赤いリボンのついたその包装紙には定期券のようなものが貼りつけられてい

た。

「何？　おみやげ？　これ」

「まあ、いいから開けてみろ」

中身はチョコレートだった。古風な父も、明日がバレンタインデーだということを知っていたのだ。おまけにその定期券は「愛の定期券」なるもので、期限は来年の二月十四日までである。裏にはメッセージがあった。

「ケンカをしても、交換日記は一年間続けようね」

私は女だてらにチョコレートをもらった嬉しさと、「ケンカをしても……」のメッセージのおかしさとで、思わず吹き出してしまった。そして、私も前の日につくっておいたチョコレートを、ほんとうは友だちのためにつくったのだったけれど、

「お父さん。私もお父さんにと思ってつくったの」

と言って渡した。嬉しそうにチョコレートを食べている父を見ながら、私は、明日、学校で「愛の定期券」をみんなに見せびらかしてやろうと考えていた。

それからお父さん、実は私、真面目な顔でチョコレートを渡す相手がいないのです。

《父親から——成長讃歌》

高校生に恋愛行動は有害無益、もしそのような気配が見えたら殴る、とつねづねわたしは言っている。だからバレンタインデーに真面目な顔でチョコレートを渡す相手がいない、なんて書かれると、自分がチョコレートをもらった以上に嬉しくなるのだ。

しかし、こんどのお前の日記で一番よかったのは、それよりも「子育てごっこ時代のことにこだわらない」というところだった。これはお前のすばらしい人間的成長である。誰でもが、過去についても現在についても、人に知られたくない微妙な部分を持っている。だから、お前の昔のことをあばいているかのように見える『子育てごっこ』は負担であったろうが、一方、人間は事実から目をそむけてもいけないのである。そこのところの折り合いを、お前はやっとつけられるようになったというわけだ。やっぱりお前は、すばらしくかしこいのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com